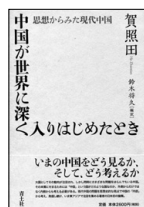


グローバル化のなかの中国思想界と知識人

川尻 文彦



四六判
290頁
青土社
[本体 2600円 + 税]

賀照田著／鈴木将久編訳
中国が世界に深く入りはじめたとき
——思想からみた現代中国

本書『中国が世界に深く入りはじめたとき——思想からみた現代中国』は現代中国で注目される論客賀照田氏の最初の日本語による評論集である。賀氏は一九六七年生まれ、中国社会科学院文学研究所の副研究員で、もともとはエリオットの詩など英文学を専攻していたというが、教養の文学研究の枠にはとどまらない幅広い領域で活躍中である。賀氏には中国語による単著『当代中国的知識感覚与観念感覚』（広西師範大学出版社、二〇〇六年。繁体字による台湾版も同時期に出版されている）がすでにあり、広範な反響を呼んだ。本書はそれとは異なり、日本での訳者鈴木将久氏（二橋大学）が独自の観点から八編の論説を採録し、編まれた評論集である。

本書の内容は以下の通りである。目次を掲げる。

第一章 困惑と不安のなかの模索——雑誌編集から見た中国知識界のいま（二〇〇二年）

第一部 中国政治を考察して

第二章 中国の現代史と思想と政治（二〇〇八年）

第三章 中国が世界に深く入りはじめたとき——ナンディと中国の歴史的ターニングポイント（二〇一四年）

第二部 中国思想を考察して

第四章 中国学術思想界を制約するいくつかの問題（二〇〇一年）

第五章 貧弱な論争 意図せざる結果（二〇〇一年）

第六章 現代中国思想論争の歴史的意義と学術的意義

(二〇〇五年)

第三部 中国社会を考察して

第七章 時代の要請と中国人文思想の再出発(二〇〇五年)

第八章 中産階級の夢の浮沈と中国の未来——近年のネット

流行語から見る中国知識青年の経済的・社会心理的

境遇(二〇一三年)

() は中国語版刊行年。

前著『当代中国的知識感覚与觀念感覚』と重複して採録されているのは、本書第一、四、五、六、七章に収められた五編の論文のみである。『当代中国的知識感覚与觀念感覚』はざっとみて本書の約二倍のボリュームがあり、学術的な文学研究(朱光潜、エリオット、竹内好)、思想研究(徐復観、殷海光、王汎森)にかかわる論文も収められている。

賀氏と同じ歳の鈴木氏とは公私ともに深いつきあいがあり、賀氏の論説の日本の学術界への翻訳紹介はこれまででもっぱら鈴木氏の手を通じて行われてきた。本書のタイトル「中国が世界に深く入りはじめたとき」は、第三章(公表時期が最も現在に近い)の論文名から採られ、副題「思想からみた現代中国」は鈴木氏が本書の内容にかんがみつけたものであ

る。本書を一読してすぐ感じるのは、() 内に中文版の発表時期を記した通り、執筆時期が一五年間ほどの長期にわたっていることである。この間の賀氏自身の問題関心や思想の変化は大きく、本書に収録された論説のカバーする内容の幅は広い。

私が見るところ、本書に収録された論説はその内容から大きく三種に分類することが可能である。順に見ていくことにする。

賀氏の名前が世に知られるようになったのは、『学術思想評論』の編集責任者としてであった。『学術思想評論』は一九九七年に賀氏と趙汀陽氏(分析哲学を専攻)を中心に創刊された雑誌であり、当時の中国のアカデミズムへの批判を目的にしていた。一九九〇年代半ばは中国大陸では「学術規範」(学問、学術活動を行ううえでのルールやマナー)の確立が強く叫ばれた時期でもあり、『学術思想評論』はそのような中国知識界の動きと共鳴しながら、独自の活動を始めた。『学術思想評論』は、ハバーマス、ハンナ・アーレント、フーコー、バーリンを当時としては先駆的に中国の学術界に翻訳紹介し、大きな反響を呼んだ。他方、中国の学術界に共通する傾向、つまり欧米的な流行理論や学術活動がもてはやされる一方で、そのような理論が生まれた歴史的・現実的な背景を無視した、

上滑りなものになっていたことに危惧を感じていた。そこで、賀氏はダイナミックに學術思想の現実に介入するような編集方針を採用した。さらに中国知識界の制度化された哲学史、文学史、思想史など旧来のモデルには回収されないような形で、中国學術思想の伝統再発掘の提唱を行った。その経緯と問題意識は第一章「困惑と不安のなかの模索——雑誌編集から見た中国知識界のいま」と第四章「中国學術思想界を制約するいくつかの問題」に詳述されている。

今日の目から見て、私の印象に残ったのは、賀氏が『學術思想評論』がとくに支持するのは二人の研究者である。一人は中国社会科学院の孫歌教授、もう一人はアメリカのフーバー研究所のメツガー教授である」（四〇頁）と断言していることである。当時の學術界の雰囲気を知る上で貴重な証言である。

孫歌氏は丸山真男や竹内好の研究で知られ、アジア論の研究者でもある。その後、孫歌氏が日本の思想や文学をアジア論的視野から論じ、いわば「スター学者」として日本の学界の注目を浴びたことは記憶に新しい（日本語による単著としては、『アジアを語ることのジレンマ』岩波書店、二〇〇二年、『竹内好という問い』岩波書店、二〇〇五年、『歴史の交差点に立って』日本経済評論社、二〇〇八年、等）。今日では中国人学者による

本格的な日本研究はけっして珍しくないが、当時としては異彩を放っていた。

メツガー（Thomas A. Metzger）は中国近世儒学の研究で知られる在米学者であり、その主著 *Escape from Predicament: Neo-Confucianism and China's Evolving Political Culture*. Columbia University Press, 1977 年、一九八〇年代には中国語訳が完成し、江蘇人民出版社の海外中国研究叢書の一つとして刊行されている。その内容は宋代以降の儒学者たちが追究してきた宇宙——人生問題の困境意識が、今日の中国政治の発展にまで影響を与えていることを論証する壮大で、難解きわまりないものである。中国大陸での中国哲学史研究のスタイルとは大いに異なる異端的なものである。

近年では、中国の学者が海外の中国研究の成果を参照し、そのメリット（と同時にデメリット）を指摘しながら、自分の研究を叙述するという論文のスタイルは、当たり前のように目にするようになったが、この時期に始まるものといえよう。二つ目の内容は、中国思想界の状況の紹介者としての賀氏の仕事である。第五章「貧弱な論争 意図せざる結果」、第六章「現代中国思想論争の歴史的意義と學術的意義」に見られる賀氏の一九九〇年代の中国知識界、思想界を総括する

一連の論説は、日本の学界において著名なものであり、研究者によって引用されることも多い（たとえば、砂山幸雄「思想解放と改革開放」日本現代中国学会『新中国の六〇年』創土社、二〇〇九年、等）。

周知の通り、中国知識人の論説（に限らず、どの国の論説でもそうだが）は様々な文脈に規定されながら、発表されるものであり、文字通り受け取ることとはできない。同じ人物でも実際に会って話を聞いた内容と、論説上で展開された内容があまりに異なっていて、驚愕した経験は私には少なくない。行間の深い読みが必要である。そのようなテキストの「裏を読む」芸当は、日本人研究者には難しい。

実際、新左派など中国の知識人は、言うことが国内と国外では違うとか、計算づくで常に言い方を変え、いつも仮面をかぶっている、などの指摘がある（馬立誠（本田善彦訳）『中国を動かす八つの思潮——その論争とダイナミズム』科学出版社東京、二〇一三年、一二五頁）。一九九〇年代の新左派と自由主義派の激しい論戦をどう評価したらよいのか戸惑っていた中で、賀氏の論説は日本の研究者にとっては、中国の学界の動向を知るための手がかりとして使われ、賀氏の随所の指摘は日本人学者に多くの示唆を与えていたように見える。

賀氏によると「新左派」と分類された者たちの基本的な価

値観と主要な関心は「自由主義」と背離するものではなかった。にもかかわらず、彼らが「自由主義」の陣営から「新左派」に分類されてしまったのは、九〇年代の自由主義に対する彼らのある種独特の批判的スタンスにあるという（二八七頁）。ここで「新左派」とされているのは、王紹光、崔之元、甘陽である。この三者に限っても彼らの思想は一樣ではなく、個別の研究が必要である。賀氏が一九九〇年代の論戦の意義を解釈し、双方の論点を手際よく整理してみせる手腕は見事であった。

賀氏の指摘でいま一つ注目すべきは、九〇年代の中国大陸学界思想界に現れた新動向として、権力エリートと知識エリートとのコミュニケーションの断絶を指摘し、憂慮していることである（一五七頁）。新左派と自由主義派の論戦のように国家の大計についての大上段からの言論が知識人の間から徐々に消えていったように見えるのはなぜか。賀氏は、天安門事件を一つの契機として知識人は国家や政府への意思決定への参与の機会が狭まっていったという。中国のかかえている問題はきわめて複雑で、多面的であり、一昔前の権力エリートと知識エリートが考えていたような制度さえ変えればすべてを変えることができるわけではなくっていったためでもあるという。

三つ目は、いまの中国社会の情勢に対する言及である。狭義の学術や思想問題を離れ、ジャーナリスト的な論説をも含んでいる。

二〇〇〇年代前半になると「新左派」と言われた人たちを含め一部の知識人たちは国家への態度を改め、政府への批判を弱めたように私たち外国人研究者には見えた。一説では知識人や大学教授の社会的な地位が高まり、中国の現状への批判力が弱まった、体制側に取り込まれたなどの粗い説明もなされたが、賀氏は第二章「中国の現代史と思想と政治」で知識人と政治のかかわりについて詳述する。賀氏は、胡錦濤・温家宝の多くの政策が彼らの考えと合致していると考え、善意をもって政府の一連の挙動・政策・公約を「胡温新政」と称えたからだと言う（五七頁）。

賀氏の政府への評価は微妙であるが、一面では政府への高い評価もみえる。「重要なポジションにいる政治人物は、さまざまな問題、情報、要求が集まってくるため、現実の具体的なメカニズムがはらむ衝突や緊張を意識する条件に恵まれている……彼らは現状の厳しさや複雑さを知識人の多くよりは明晰に理解している」（八四～八五頁）とまでいうと私には褒めすぎのような気もするが、日中の知識人の置かれている地位の違いによるのであろうか。

第八章「中産階級の夢の浮沈と中国の未来——近年のネット流行語から見る中国知識青年の経済的・社会心理的境遇」では日本でも知られる中国での受験競争の熾烈さを紹介し、第三章「中国が世界に深く入りはじめたとき——ナンディと中国の歴史的ターニングポイント」では大国化している中国が周辺諸国にとって「脅威」となっている現状——賀氏は「中国大陸が自己感覚と国際感覚の両面でおちいつている思考のジレンマ」（二一六頁）という——について中国知識人の立場から抑制の利いた比喩的な表現を多用して説明する。中国の肥大する大国意識について「中国大陸が「植民された経験」をもたないゆえに、周辺の国家の植民地モダニティおよびそこから引き出される多方面の歴史・社会・文化・心理的帰結を理解することが一層困難になっていること、しかもそれは中国大陸が周辺の国家を自己の拡張としてではなくほんとうの意味で「他者」として理解するためには不可欠である」（二二頁）と説明している。

賀氏はご自分の専門を思想史と規定している。その経緯については訳者の鈴木氏が「訳者まえがき」で丁寧に説明しているが、日本語でいう思想史研究とも中国語でいう思想史とも微妙に違う。私なりに解釈すれば、アカデミックスを持った学術評論家とでもいふべき立場であらうと思われる。日本

語の語感では評論家といえ、根柢なく勝手気ままに放談する人というイメージが強いが、それとは異なる。このような立ち位置の中国知識人は少なく、貴重である。

一〇年近く前、東京で開かれたある国際シンポジウムで幕間の休憩時間に話しかけた私に気軽に雑談に応じて下さったが、その時の賀氏の印象は非常に若々しかった。時は流れ、本書の「作者後記」で述懐するように（二五八頁）、賀氏自身も歳とったということを痛感しているようだ。まさに「人、中年に到る」の心境であろう。

しかし、本書からより強烈に感じられるのは、賀氏が歳とったということよりは、中国そのものも歳とったということであろう。歳とったというより、思春期、青年期を経て、身体も大きくなり、自信をもつとともに、さまざまな悩みを感じることになった中国である。

この小さな本を読んでみて、いまの中国に起こっていることを「正確」に理解することの大変さを痛感した。賀氏の理路を理解することは容易である。しかし、賀氏の議論をいまの中国のあらゆる現状のなかに位置づけて、評価することは難しい。

中国人は多様である。日本人以上にその多様さには幅がある。賀氏もその中国知識人の一人であり、数多くいる知識人

の一人に過ぎないことを気に留めておく必要がある。彼の論著で日本語に翻訳されているのはその一部でしかない。彼自身も大きく変化している。賀氏に対するさらなる研究が必要である。

私は現代／当代の中国思想を専門的に研究する者ではなく、この小文にも誤解に基づくあやまりも多々あるうかと思うが、問題提起として意味があるのではと考え、あえて紹介の筆をとった次第である。

（かわじり・ふみひこ 愛知県立大学）

常設展 中国陶磁器―館蔵コレクションから―

▼会期…6月7日（土）～7月27日（日）10時～17時（入館は16時30分まで）▼休館日…月曜日（ただし7月21日は開館し、22日は休館）▼場所…和泉市久保惣記念美術館（大阪府和泉市内田町3-1-1）▼入館料…一般五〇〇円、高・大生三〇〇円、中学生以下無料▼お問い合わせ…和泉市久保惣記念美術館（TEL：075-654-0001）▼主な展示品…彩陶・白文・灰耳壺（新石器時代）、青磁鉄斑・天鵝壺（東晋時代）、三彩壺（唐時代）、青白磁・瓜形水注（南宋時代）、白釉面盆（北宋時代）（国宝）、青磁鳳凰耳花生・銘万声（南宋時代）、玳瑁・花鳥文碗（南宋時代）、青磁・花文梅瓶（金時代）、五彩・花鳥文鉢（明時代）、青花粉彩・器玩・碗（清時代）、紫泥・茶鉢「萬豊順記」印款（清時代）